

ハードル走授業における学習者の認識に関する研究

－小学校6年生を対象とした授業実践を通して－

前三盛 喬貴 (東京学芸大学)

1. 目的

本研究では、ハードル走授業において「できるだけ早くゴールへ到達する」という運動目的を達成するために、学習者は、どのようなことを運動課題として理解し、どのような運動技術を必要と捉え、どのように獲得・習熟するのかという認識について明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

- 1) 対象者：都内 F 小学校第6学年 (38名)。
- 2) 調査方法：令和3年9月にハードル走授業を実践。実践前後にハードル走の運動技術に関する質問紙調査を実施。また、毎時間の学習感想文の記述及び授業映像を記録。
- 3) 分析方法：質問紙調査の結果は SPSS を用いた統計分析。学習感想文は、授業映像とすり合わせながら、記述にみられる認識対象にコードをつけ、類似するもの同士をカテゴリーとして生成する感想文分析。

3. 結果と考察

- 1) ハードル走の運動技術に関する授業実践前後の意識を比較するために t 検定を行った結果、いくつかの項目に有意差がみられた (図1)。学習者は、細かい動作ではなく、1台目まで加速して減速の少ない踏み切りをすること、空中から着地をスムーズにつないで少ない歩数でインターバルを走ること

の重要性を意識していると考えられた。

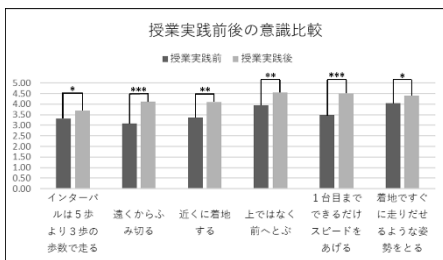


図1 ハードル走の運動技術に関する授業実践前後の意識比較

- 2) 感想文分析の結果、学習者の認識には運動目的を達成するための運動課題として「より速く少ない一定歩数」の重要性を理解し、それを解決するための運動技術を見出し、身体操作を工夫して獲得・習熟するという運動技術の階層性がみられた。
- 3) 特に跳動作から走動作へ運動組み合わせが求められる着地局面において、空中局面から着地後の疾走動作を意識する運動の先取りを行い、シザース動作 (脚の挟み込み動作) をすることによって「終末局面と準備局面を中間局面に融合 (マイネル, 1981)」する局面融合をスムーズに行おうとする認識がみられると考察された (図2)。

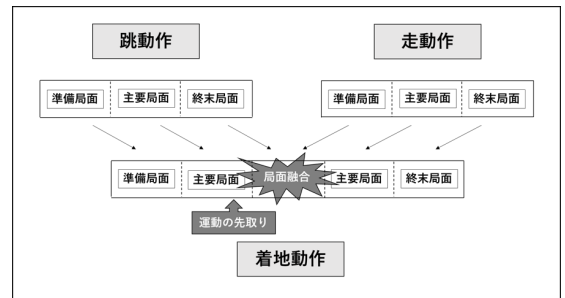


図2 局面融合及び運動の先取りに関する認識の概念図

4. 結論

本実践における学習者には、「より速く少ない一定の歩数」で走り通すことを運動課題として理解し、そのために、走運動と跳運動の運動組み合わせが求められる踏み切り・着地技術を中心に、身体操作を工夫して獲得・習熟する認識がみられると明らかになった。そこには、運動技術の階層性に関する認識、着地局面において局面融合及び運動の先取りに関する認識がみられると示唆された。

5. 主な参考文献

- 1) クルト・マイネル：金子明友訳 (1981) マイネル・スポーツ運動学。大修館書。